

作品解説文が美術館での鑑賞に与える影響 フィールド実験に基づく探索的検討

Effect of reading commentaries on artworks in appreciation in museum: An exploratory study based on a field experiment

田中吉史

Yoshifumi Tanaka

金沢工業大学

Kanazawa Institute of Technology

tanakay@neptune.kanazawa-it.ac.jp

概要

美術初心者への美術鑑賞における解説文の効果、実際の美術展でのフィールド実験によって探索的に検討した。作者による解説文を読む条件、作者による解説文に基づいてより能動的に鑑賞するように促すよう指示する問いかけ文条件、解説文なしで鑑賞する条件を設け、15 ペアの美術初心者が、ある現代美術展を鑑賞した。問いかけ文条件では解説文なし条件よりも長時間かけて美術展を鑑賞した。鑑賞中の会話内容の分析により、解説文の内容と作品の特徴との相互作用について検討する。

キーワード: cognitive constraints, art appreciation, field experiment, art museum

1. はじめに

これまで、絵画鑑賞において絵画に関する解説文が美術初心者による鑑賞過程に影響を与える可能性について検討されてきた [4, 5]。これらの研究から、解説文を読みながら絵画を鑑賞する経験が、のちに別の絵画を鑑賞する際に影響を与えることが示唆されてきた。美術初心者は、絵画中に描かれた事物の同定に固執する傾向が強いことが、具象画、抽象画双方においてみられ、これを写実性制約と呼ぶ [2, 4, 5, 6]。具象画の鑑賞においては、描かれた対象物についての解説文ではなく、絵画中の構図などについての解説文を読むことで、写実性制約が緩和される可能性が示唆されている [4, 6]。

これまでに行ってきた我々の研究 [4, 5, 6] では、実験室で、あらかじめ実験的に操作された解説文を読み、指定された時間かけて絵画を鑑賞する、という方法がとられてきた。では、実際の美術館での絵画鑑賞において、解説文は鑑賞過程にどのような影響を与えるのだろうか？美術館では作品の鑑賞を助けるため

に、作品とともに鑑賞者に解説文が与えられることが多い。特に、現代美術においては、美学的背景、表現媒体や手法、スタイルなど様々な作品が存在し [1]、解説文が鑑賞者をガイドするのに大きな影響力を持つ可能性がある。では、こうした解説文は、実際の鑑賞過程にどのような影響を与えているのだろうか？現代美術の鑑賞の際には、キュレーター等が鑑賞のポイントを解説したものだけではなく、作者自身が書いた解説文が鑑賞者に与えられることもある。もちろんどのような解説文を与えるかは、作者自身の考え方によっても様々に変化しうるし、どのような解説文が望ましいのか、ということも一意に決められるものではない。とはいえ、作品についての解説文が、実際にどのように鑑賞過程に影響を与えるのかを検討することは、美術初心者がどのように美術作品を認知するのか、ということを考える上で、有益なヒントを与えることと考えられる。また、どのような作品において、どのような解説文が、鑑賞者の反応をどのようにガイドするか、ということについての一般的な傾向が明らかになるならば、作家がどのような解説文を提供すればよいのかということを考える上での手掛かりにはなると思われる。

そこで、本研究では、実際の美術館で開催された美術展をフィールドとした探索的な実験を通して、作品についての作者自身による解説文が、作品の鑑賞にどのような影響を与えうるか、検討を行う。本研究では、美術初心者に 2 人一組で実際の美術展を鑑賞してもらい、鑑賞中の会話を分析する。また、その際に解説文をまったく見ずに鑑賞する条件、作者による解説文を読みながら鑑賞する条件、さらに、作者による解説文をもとに、より能動的に見て考えるように方向付ける「問いかけ文」を読みながら鑑賞する条件を設定し、作者による解説文の内容と、作品の特徴との関係

を、探索的に検討する。

2. 方法

2.1 フィールドの概要

協力を得た美術展は、2016年9月下旬から10月上旬に、金沢市内の美術館で開催された日本とベルギーの現代美術家による国際交流展であった。ここでは、日本と相手国双方から合計34人の作家（いずれも在命中）の作品が展示された。作品は絵画、版画、写真などの平面作品を中心に、インスタレーションや陶芸などの立体、ビデオ作品など多岐にわたった。会場は10のスペースに分けられ、各スペースの壁1面に一人の作者の作品が複数点展示されていた。作家の中には、作品自体のほか、作品の題名を明らかにしなかった人や、出典作品や作家自身（プロフィールや制作方法、美学的背景など）についての解説文を提供しなかった人もいた。そのため、会場では作品と作者のネームプレートだけが掲示された。出展作家を紹介する図録が別途有料で販売された（入場料自体は無料であった）が、多くの入場者は作者名と作品だけを見て鑑賞していた。

2.2 手続き

フィールド実験では、美術初心者の大学生30人が2人1組（合計15組）でこの美術展を鑑賞した。参加者は以下の3つの条件のどれかに5組ずつ割り当てられた。「解説文なし条件」では、会場内の作品の配置を示したマップのみが与えられた。「解説文あり条件」では、出展作家のうち、題名を寄せられた作品については題名と、解説文を寄せた作家16人については、その文章を印刷したパンフレットをペアごとに1冊渡し、それを見ながら鑑賞するように指示した。「問いかけ文条件」では、さらに能動的な鑑賞を促すために、解説文のある作家について、解説文で述べられた内容と作品がどのように関連しているかを問いかける質問文が印刷されたパンフレットが渡された。

各参加者は会場入り口でICレコーダとコンタクトマイクを装着された。そして、作品を自由に鑑賞すること、二人で一緒に行動して作品に関して気づいたことを何でも自由に会話してよいこと、会話を録音すること、なるべくすべての作品を見ること、「解説文あり条件」「問いかけ文条件」では解説がある作家の作品についてはそれに目を通して鑑賞すること等が教示され、同意書に署名した後、各ペアのペースで美術展を鑑賞した。

3. 結果と考察

3.1 全体的な鑑賞時間への影響

美術展では作家ごとにまとめて作品が配置されており、参加者も作家ごとに鑑賞していた。一作家あたりの平均鑑賞時間は、1分30秒から3分15秒であった。また、美術展全体の鑑賞時間（参加者が入場してから出てくるまで。以下の値はいずれも中央値）は、「解説文なし条件」が64分、「解説文あり条件」が73分、「問いかけ文条件」が104分であった。1要因3水準の分散分析を行ったところ、条件の効果は有意であり（ $F(2, 14) = 4.389, p < .05$ ）、Ryan法による多重比較の結果、「解説文なし条件」よりも「問いかけ文条件」のほうが有意に鑑賞時間が長かった。

3.2 解説文の効果と発話内容

これまでの研究との比較を行うため、解説文の用意された作家のうち、平面作品を出展した作家の作品に絞ってさらに分析を行った。

各作家に対する鑑賞時間を見たところ、全体的には「解説文なし条件」よりも「問いかけ文条件」のほうが鑑賞時間は長い傾向が見られた。しかし、「解説文なし条件」と「解説文あり条件」、「解説文あり条件」と「問いかけ文条件」の間の差は、作家によって異なる傾向が見られた。また、解説文の内容や作品のスタイルとの関係によっても、鑑賞者の反応に違いがあることが見受けられた。解説文の呈示された参加者の中には、冊子に掲載された解説文に気付かず、それを読まずに鑑賞したり、いくつかの作品を鑑賞しなかったりしたケースもあった。これらのことを考慮して、以下の分析では4人の作家の作品に焦点を当て、解説文の特徴と作品のスタイルとがどのように鑑賞過程に影響を与えるのかを検討する。なお、以下の分析では、各作家において解説文を読む条件で解説文を読まなかったペアの発話は、その作家の分析からは除外した。

3.2.1 分析対象とした作家の特徴と解説文

作家Aは、既存の写真を手書きで転写してネガを作成し、それを感光紙にプリントするという手法を用いて制作しており、作者による解説文では、この手法に関する説明が中心に述べられていた。また、これに基づく問いかけ文では、この手法が通常の写真とはどのような点で異なった効果を生んでいるか、また作者はどのような意図でこの手法を使っているのかを話し

合うように指示された。今回の美術展では、こうした手法による作品が多数展示されており、多くの作品では、素材となった写真に写った対象物がある程度明確に同定できた。

作家 B は、油彩による絵画 2 点が出展された。作家 B は作家 A と同様、制作の過程について解説している。それによると、作品は部分ごとに描き進められ、ズレを伴いながら全体が構成されることで緊張状態が生み出される。問いかけ文では、こうした制作過程によって生み出される緊張状態が作品のどのような部分に見られるかを話し合うように指示された。

作家 C は、版画家であり、この美術展では、イチョウの葉を紙の上に並べてプレスする、という方法による連作が並べて展示された。作者による解説文では、この作品の制作過程については触れられず、木々の葉を並べることで社会の中の人々を表現しようとした、という表現意図が述べられていた。問いかけ文では、こうした表現意図が、作品のどのような部分に表れているかを話し合うように指示された。

作家 D は、油彩による抽象的な絵画 3 点が出展された。作者による解説文では、今回の作品では地層と窓をモチーフとしているが、何を見出すかは見る人自身の想像力にゆだねられる、といった趣旨のことが書かれていた。問いかけ文では、この解説文を紹介した後、この作品から思い起こされる各自の記憶について話し合うことが指示された。

4 人の作家の作品に対する各条件の参加者の平均鑑賞時間（解説文を読んだ条件では、そのうち、会話中に 2 人の参加者が解説文を読んでいる平均時間）を表 1 に示す。全体に「問いかけ文条件」は他の条件よりも鑑賞時間が長い、作家 B、D では、「解説文あり条件」では、解説文を読んでいる時間を除くと「解説文なし条件」よりも鑑賞時間が短かった。

3.2.2 鑑賞中の会話内容の分析

次に、各作家の作品の鑑賞中の会話内容を分析する。

各参加者ペアごとに、各作家の鑑賞中の会話をテキストに起こした。そして、先行研究 [4, 5] を参考にして、表 2 に示すカテゴリーを設定し、各会話中にそのカテゴリーの発話が見られた個所をマークしていった。

これらのカテゴリーの発話の頻度の合計のうち、各カテゴリーの占めるパーセンテージを、表 3 に示す。全体に、どの作家においても、作品に描かれた具体物・状況の解釈が高い比率を占めていた。また、作品に対

する評価（「好き」「面白い」など）は、「解説文なし条件」で多い傾向があった。また、「解説文あり条件」「問いかけ文条件」では、解説文を読み始める前にこれらのカテゴリーの発話が行われることが多く、こうした評価に関する発話が、かなり直感的になされていることを示唆する。

次に個々の作家ごとに、その特徴をまとめる。作家 A の鑑賞時間は他の条件よりも長かったが、これは作品の出展数が他の作家よりも多めだったことにもよるであろう。「解説文なし条件」では、この作家の作品が写真なのか絵なのか、という発話媒体の確認）が比較的多くみられたが、解説文を読んだ条件では、解説文に制作方法が書かれているため、こうした発話は減少した。また、作品中の対象物や状況を解釈する発話の比率は、解説文を読む条件では減少しており、代わって形式的要素への言及の比率が増加していた。また、「問いかけ文条件」で作者がなぜこのような制作方法を取るのか、ということについて問いかけていることから、作者の意図についての発話が、他の条件や他の作家よりも多くなっていた。なお、作家 A の作品でのポジティブな評価には、ほとんど写真と同じように写実的に対象物を描く技術に対するもの（「すごい」など）が多く含まれていた。

作家 B も、作家 A と同様に制作方法についての解説を行っていたが、作家 A とはやや異なる傾向が見られた。作家 B における「解説文なし条件」では表現方法への言及が多かったが、これは「子供みtainな絵」といった発言が多かったことによる。作家 B の作品は、いずれも女の子を想起させる単純化された人物が横たわるように描かれており、また他の部分とのバランスが微妙に崩れた印象を与えることから「子供の絵のような」という印象が生じたのかもしれない。解説文には、そのアンバランスさが意図されたものであることが記されているので、そうした印象は減少した可能性がある。解説を読んだ条件では「漠然とした印象」が増加しており、解説文にあるような意図された全体的なアンバランスさに着目することで、全体としての印象に関する発話が増えたのかもしれない。なお、「問いかけ文条件」では、作者の言う「緊張状態」がどのようなところから生み出されるか、ということについて考えるよう指示されたが、構成要素間のバランスに帰属した参加者はなく、ほとんどの参加者は、横たわる人物の体に何かが絡みついて見えたり、何かの上に乗っているように見えることに帰属させていた。

作家 C では、イチョウの葉を同定することは非常に

表 1 各作家の作品の鑑賞時間と解説文を読む時間の平均（分'秒"）

	作家 A		作家 B		作家 C		作家 D	
	鑑賞時間	(解説文)	鑑賞時間	(解説文)	鑑賞時間	(解説文)	鑑賞時間	(解説文)
解説文なし	2'39"	-	2'03"	-	1'05"	-	1'25"	-
解説文あり	3'24"	0'31"	2'01"	0'27"	1'53"	0'29"	1'18"	0'17"
問いかけ文	5'25"	0'41"	3'37"	0'36"	2'55"	0'27"	2'21"	0'15"

表 2 会話内容のカテゴリー

カテゴリー	説明
ポジティブな評価	「好き」「面白い」「すごい」などの肯定的評価
難解さ・理解不能性	「わからない」「難しい」など
漠然とした印象	作品全体や一部の領域から受ける全体的な印象
具体物、状況の解釈	作品に描かれた対象物や状況を特定し解釈する
形式的要素への言及	作品中の色、形、濃淡などへの言及
奥行・構図	作品中の構図や奥行への言及
制作手法	制作の手順、用いた器具などへの言及
媒体の確認	作品が絵画、版画、写真のどれかを確認する
表現方法	作品で取られた表現の仕方に対する言及
作者の意図の推定	作品を作った（あるいは作品の一部についてそのような表現を用いた）理由の推定

容易であったこと、他に具体的な対象物が画面にはないことから、「解説文なし条件」では具体物や状況の解釈は少なかった。解説文を読む条件では、解説文の記述に沿う形でイチョウの葉を「人」や「社会」として解釈する発話が増加し、具体物や状況の解釈が増加していた。「問いかけ文条件」ではさらに形式的要素に対する言及が増加したが、ここでは色やそのかすれ具合、並べられた連作の間の変化を、解説文に記述されたように、人間関係や社会の変化の象徴として捉える発話が増加していた。

作家 D の解説文は、今回分析した 4 人の作家の中で、最も直接的に鑑賞者の自由な解釈に委ね、能動的な鑑賞を促すことを意図したものであった。その結果、4 人の作家の中で、具体物や状況の解釈が多く、特に問いかけ文では 65%にものぼる発話がこのカテゴリーを占めていた。発話の内容を見ると、「解説文あり条件」では、解説文に地層と窓がモチーフとなっていたことが書かれているため、具体物の解釈としてほとんどが地層か窓に限定されており、「解説文なし条件」のほうがむしろ解釈の種類は多様であった。「問いかけ文条件」では、解説を読んだ後、2 人で連想したものを列挙する発話が続いた。

4. 総合的考察

本研究では、美術作品の鑑賞時に与えられる解説文が、鑑賞過程にどのような影響を与えるかを、実際の

現代美術展での鑑賞者の会話をもとに検討してきた。

全体的傾向として、これまでの研究でも指摘されてきた通り、美術初心者には作品に描かれたものを何らかの具体物や具体的な状況として解釈する傾向が強いことが確認された。今回分析対象とした作家の作品は、我々の先行研究 [5] で用いられたものと比べると、何らかの具体物としての解釈がある程度可能なものであったことの影響はあるかもしれない。また、作家 A におけるポジティブな評価が、対象物のリアルな再現の技術に対して行われることが多かったことから、美術初心者はそうした写実的な表現を重視する傾向が強い [2] ことも確認できた。

作品に対する評価が「解説文なし条件」や、解説文を読む前に行われることが多いことから、作品に対する好みの判断はかなり短時間で直感的に行われていることが示唆される。こうした好みかどうかの判断は、美術鑑賞における発達でも早い段階で見られることが知られており [3]、それと符合する結果と考えられる。

解説文の効果についてみると、作家 A と B はともに作品の制作方法について解説していたが、それが鑑賞者の会話に与える影響に関しては異なる点が見られた。作家 A では、鑑賞者の発話でも形式的要素のほか制作手法に関する発話が、作家 B の作品よりも多い傾向が見られたが、これは特徴的な制作手法によると考えられる。また、作家 B と比べて、ポジティブな評価

表 3 各作家に対する発話における各発話カテゴリーの比率（%,C=解説なし、S=解説あり、Q=問いかけ）

作家 条件	A			B			C			D		
	C	S	Q	C	S	Q	C	S	Q	C	S	Q
評価	11.67	10.89	9.89	4.26	4.17	0.99	21.43	5.17	7.35	10.71	6.06	6.98
難解	1.67	1.98	4.40	2.13	6.25	4.95	2.38	10.34	4.41	1.79	3.03	0.00
印象	8.33	4.95	3.30	8.51	16.67	14.85	2.38	6.90	2.94	3.57	0.00	0.00
具体物・状況	50.00	43.56	42.86	43.62	52.08	40.59	28.57	43.10	42.65	55.36	60.61	65.12
形式的要素	8.33	18.81	19.78	19.15	16.67	12.87	26.19	13.79	30.88	19.64	27.27	20.93
奥行・構図	1.67	3.96	1.10	4.26	0.00	5.94	0.00	8.62	2.94	0.00	0.00	0.00
制作手法	5.00	2.97	5.49	0.00	2.08	8.91	9.52	3.45	2.94	5.36	0.00	2.33
媒体の確認	11.67	4.95	3.30	1.06	0.00	0.00	4.76	3.45	5.88	0.00	0.00	0.00
表現方法	0.00	7.92	0.00	14.89	2.08	5.94	2.38	1.72	0.00	1.79	0.00	2.33
意図の推定	1.67	0.00	9.89	2.13	0.00	4.95	2.38	3.45	0.00	1.79	3.03	2.33

が多く、難解さの表明も少なく、さらに解説文を読んだ条件では描かれた具体物や状況についての解釈が減少し、形式的要素へ着目が増えていたが、これは、素材が写真であることから、対象物の同定が比較的容易であったことによるのかもしれない。我々の先行研究 [6] では、具象画の中でも、特に対象物の同定しやすいもののほうが、絵画の構図や表現方法に着目しやすくなる可能性が示唆されているが、作家 A と B に対する反応の違いにも、同様のことが言えるのかもしれない。一方、作家 B では、解説文により絵画全体への注意が促され、全体的な印象や構図、制作方法自体への言及が増加していたと考えられる。

また、解説文に具体的な事物が書かれていると、鑑賞者はそれを大きな手掛かりとして用いることが、作家 C の作品に対する反応や、作家 D の「解説文あり条件」に対する反応から示唆された。我々の先行研究 [6] でも、具象画の鑑賞においては、描かれた対象物に注目して鑑賞する経験の後では、写実性制約がより強められる可能性が示唆されており、このことと共通した効果が見られたのかもしれない。

このように、解説文は鑑賞者の着眼点をガイドする効果を持つが、同時に解説文の効果は絵画がどのようなスタイルや手法で用いられているか、ということとも相互作用を持つことが示唆された。逆に言えば、解説文は鑑賞の際の制約にもなりうる、ということでもあるだろう。その意味で、鑑賞者の自由な見方を保証し、それを促すために、解説文を提示しなかったり、あるいは自由に発想してみることを促すような指示を与える、ということはある得だろう。一方、実際に鑑賞者の自由な反応を促すような解説文を呈示した作家 D の作品に対する反応では、むしろ鑑賞者は作品か

ら何らかの具体的な事物として解釈することに集中してしまう傾向も見られた。もちろん、何を鑑賞者の自由ととらえるかは、その作家のスタンスによっても変化するもので、冒頭にも述べたように、一概にどのような反応が望ましいということとはできない（本研究も、作家の美学と関わりなく、どのような鑑賞者の反応や解説文が最も望ましいのかを判断することを目的とするわけではない）。

ところで、我々の先行研究 [4, 5, 6] では、制約緩和的な観点から、創造的な鑑賞を促すために写実性制約を緩和するためにはどうしたらよいか、という考え方がとられてきた。しかし鑑賞者が、単に描かれた事物を特定する以外の様々な情報を読み取ることができるようにするためには、逆に鑑賞者がもつ写実性制約を積極的に利用した支援手法が有効なのかもしれない。今後はこうした観点から鑑賞者の支援手法について検討することが、一つの課題となると考えられる。

謝辞

本研究は JPSP 科研費 JP15K00213 の助成を受けたものです。また、本研究のフィールド実験は、福井大学の湊七雄先生からの多くの協力がなければ実施することができませんでした。ここに深く謝意を表します。

文献

[1] Arenas, A., (1998) “Is This Art: A Guide for the Bewildered” (福のり子 (訳) “なぜこれがアートなの?”), 淡交社.
[2] 石橋 健太郎・岡田 猛, (2010) “他者作品の模写による描画創造の促進” 認知科学, Vol. 17, No. 1, pp. 196-223.

- [3] Parsons, M. J. (1987) “How We Understand Art?” Cambridge University Press. (尾崎彰宏・加藤雅之 (訳) “絵画の見方—美的経験の認知発達”, 法政大学出版局)
- [4] 田中吉史・松本彩希 (2013) “絵画鑑賞における認知的制約とその緩和” 認知科学, Vol. 20, No. 1 pp. 130-151.
- [5] 田中吉史 (2017) “美術初心者は抽象絵画をどう鑑賞するのか?—発話に基づくタイムコースと解説文の効果の検討” 日本認知科学会第 34 回大会論文集, pp. 544-552.
- [6] 田中吉史 (2018) “美術初心者は絵画から何を読み取るか?—具象絵画鑑賞時の発話による探索的な検討” 認知科学, Vol. 25, No. 1, pp. 26-49